

兵庫県伊丹市大字 野間の小字地名

野間は伊丹市の南西端。平安末期から室町期の「野間庄」には、現在尼崎市の時友（トキトモ）友行（トモユキ）の名田も含まれていたという。ノマは、沼沢地を意味する地形語ヌマの転訛であろう。

「高上（タカンジョウ）」は南に接する東富松村（尼崎市）が低湿田なのに比べて、高台の良質田だったことから名がついたという。だが、その「高上」も昭和11年頃、黒土・才満（サイマ）・小池・四鞍田（ヨクラダ）・イノソなどとともに大手私鉄電鉄に買収され、宅地化した。その大部分が現在の「車塚」。古墳からついた小字が、開発地の商品名によって拡大された例である。野間全域が昭和46年からの土地区画整理事業ですっかり住宅地に変わったが、小字はかつての地形の復元材料である。

来福寺来徳はそれぞれの土地区画土地区画整理完工記念碑に、その名が刻まれている。来福寺は「福が来ることを念願してつけた名前」で来徳は来福寺の住民が毎朝、この方角（東）を拝んで徳の招来を祈ったことによるという。（辰巳順彦）文化14年（1817）の高覚帳（生産高の控え）によると、頭にライのつく地名は来迎寺や雷○寺の他は来福寺も来徳も見当たらないので、それ以降の地ならば、地域の伝承に従うことが妥当であろう。

野間の小字

1. 野間道（ノマミチ）※位置は「野間北」の案内板地図を参照

この地区の西は時友（尼崎）、北は山田と境をなしている。東は寺本で西国街道と合流する「行基道」と呼ばれる村道、南は南東角より西に分岐し、西宮方面に通じる。「時友道」に囲まれ、交通の便に恵まれた野間の北の出入り口（西国街道から入る野間地区の最初の地点）に当たる処から付けられたものであり、検地の際は、この地区から始められている。なお、この地区は面積の広い田が多い。

2. 若宮（ワカミヤ）

この地区の北部（20番）に「若宮」と呼ばれる神社（健速神社分社）があり、その廃社跡は小高い丘になっており、大正くらいまでは松の大木がそびえていた。その若宮に対し「字 垣内」に「古宮」があった。南北に長く南に未広がりの形で平坦な地域であった。

3. 西ノ口下（ニシノクチシタ） 西口ノ下（ニシグチノシタ）

西ノ口道ノ下（ニシノクチミチノシタ）

次の「西ノ口道ノ上」に対称したものであるが、なぜか「西ノ口下」になっており、さらに登記簿には「西口ノ下」となっている。（地元では驚いているという）「字 垣内」とともに比較的小面積の田が多い。北の里道から南の川（富松川）まで、一筆の南北に長い田が多く、東側は集落に近く、やや高い。富松川は友行（尼崎）との境界である。

4. 西ノ口道ノ上（ニシノクチミチノウエ）

東に集落の中心部の健速神社（タケハヤジンジャ）（字 来福寺）があり、北部の広い、逆長方形で中南部の一部は低湿地。なお、前述の「字 若宮」と併せると、ほぼ、四角形となる。戦国時代、この健速神社の森と、西に隣接する時友神社（尼崎）の南を通りその西に「しんこ山」とよばれている砦（柵）を結ぶ軍事用幹線道路（里道）があり、その「西出入り口」にあたるところから、その道の北側を「西ノ口道ノ上」といったそうだ。健速神社の森も「砦」であったといわれている。

5. 笠松（カサマツ）※位置は「野間北」の案内板地図を参照

前述の「字 野間道」との間に「行基道」があり、当地区北部の、この「行基道」の近くに、笠を開いたような、枝を張った松の大木があった。往古、この地区は松林であったが、その中でも、この「笠松」が大木であったといわれている。共同利用施設「野間笠松センター」はこの小字名を利用した。四角形で、中部に川があり、東側は湿地があり、東部は高台地で、交通の便が悪かった。

6. 北ノ口（キタノクチ）

位置的にも、道路的にも、集落地（字 来福寺）の北の出入り口にあたる。すなわち、集落のすぐ北にあり、東から行基道が北西に向かい、西（健速神社の東）から伸びた道と、この北ノ口の北で、合流し、北へ行基道、西へ時友道に分岐する所である。やや東西に長く、南北に短く、さらに西部が広く、東部の狭い三角形で段差がある処である。

7. 野間ノ角（ノマノカド）

地元では「ヤマノカド」と呼んでいる。集落の北東に位置し、即ち、「字 北ノ口」から行基道をはさんで北東に、集落の東の「字 東ノ口」の北に位置している。この3点の分岐点を「ヤマノカド」と呼び、里道（畦道）が3本、行基道から北に向かって、「字 北向」に農道が分岐している。この「字 北ノ口」「字 東ノ口」の両小字を挟んで「角にあたる」ので、この地名となった。あるいは、この「角」を点に、対称の位置にある前述の「字 野間道」との「筋向い」であるためとも考えられる。「字 野間道」の筋向いの部分は「角」になる三角形で、東西に長く広がる長方形で割合平坦な地形であった。

8. 北向（キタムカイ）※位置は「野間北」の案内板地図を参照

野間地区全体の中央部北端にあり、「字 野間ノ角」の向うにあるところから、こう呼ばれた。前記「字 野間ノ角」の分岐点は行基道の西への曲がり角でもあった。殆どが四角形の四角い田が多くかつた地域で東部は低く、一部、湿地帯があった。

9. ハツレ松（ハツレマツ）※位置は「野間北」の案内板地図を参照

江戸中期頃まで、西の「字 笠松」から「字 北向」の北部、さらに当該地区まで、松の大木が「葉を連ねて」東西に並んでいた。その名残が「字 金和田」北端（当該地区南端）にあった庚申塚の山の上にあり、「野間の一本松」と呼ばれた大木で、甲山からでも、見えていたが、戦後、枯れてしまった。また、この庚申塚も山陽新幹線の工事で撤去された。この「野間の一本松」は大正初期の5万分の1の図面にも明示されており「陸軍演習の好目標」となり、有名であった。今はその面影は無く、昭和51年に区画整理されたが、新しくなった「字 ハツレ松」地内に造成した「一本松公園」にその名を寂しくとどめている。北に堀池地区の「字 ハツレ松」が隣接しているが、同様の地区であ

った。東西と南北が突出したひし形の広い農地、高台地の漏水田が多い地域。

10. 熊野（クマノ）※位置は「南野北」の案内板地図を参照

居住地から遠く、村はずれの原野であり、「熊の出そうなところ」からの命名かもしれない。なお、区画整理時に判明したが、当該地区の中間を通る農道は、堀池村から伊丹へ通じていたが、農民が出し合って拡幅したようであり、登記面では抹消されておらず、組合で後始末をした。東部は「堀池字ハリノキ」とその飛び地と「南野字西向」に境界が入り込み、その飛び地で、南北が分断された形になっている。

11. 嶋中（ハタケナカ）畠中

「南野字西向」に東で隣接し北北西から南東に細長い地域で、現在、笛原小学校の北から南東の3分の1くらいを含んでいる地域で、西には次に述べる落差の大きい清水田湿田があるが、その「水」は利用できない。その名のとおり、やや高台の農地で干害を受けやすく稻作に適せず、また、集落より遠かったので、畠として使用した田が多かった。綿花・茶などが栽培されていた時もある。また、戦時に軍用工場用地として、「製鉄関係会社」に強制買収されたことがある。

12. 清水田（シミズダ）

名のとおり、北部に湧き水の出る田があり、この水系を利用する南北に長い湿地帯の地域で、二毛作のできにくい田が多く、耕土は深く、粘土質であった。湧き水の原因は西側「字 高野」及び、東の「字 嶋中」の両高台農地に挟まれ、その北部にある「字 ハツレ松」地区が土質の関係で漏水田が多かったためと思われる。当地区の南3分の2の部分は笛原小学校の北西から南東にかけての3分の1をしめている。

13. 高野（タカノ）

小字は一般的に水利の関係で水系が主となる。当地区は高台で水利の便が悪く、道路・里道および水路で区分されていた。当地区はハツレ松水系であったが、野間地区約60町歩の殆どが水田で、水の絶対量が不足していた。おまけに高台にあったため水利が悪く、稻作の代わりに果樹栽培をしたため「梅ノ木」とも呼ばれた。南北に長く、笛原小学校の西から南にかけての3分の1をしめている。墓地あり。

14. 金和田（カナワダ）

「カナワダ」はカナワリ（洪水で耕地の荒廃したところ鏡味完二説）であろう。集落から堀池を経て北へ通じている村道が当地区の中央部を南西から北東に通じ、また、そこから当地区の南を通り「字 高野」に至る農道に囲まれていて、交通の便が良かった。また、水利も土質も良好の上等田で二毛作が作りやすい一等地であった。このため、小作料も「一石六斗五升」と高値であった。このように収益が多かったことに起因して、この地名になったという説もある。東西にやや長い四角形で中部地区がやや高く、前述の庚申塚を含む。区画整理されているので、現在の地区とは、少し異なっている。

15. 東向（ヒガシムカイ）

集落の東にある「字 東ノ口」の東にある農地で、「東ノ口の向う側」あるいは「東ノ口に向かう」ための名ともいわれている。この地区は広く、道が遠く少ないので欠点であったが、段差が少ない、水持ちの良い平坦な地形で、やや、砂質土壤の肥沃の土地で、

北に隣接する前述の「字 金和田」と同様、良質の農地であった。区画整理されているので、現在の地区とは、少し異なっている。

16. 東ノ口 (ヒガシノクチ)

この地区も名の通り、集落の東の出入り口にあたる。すなわち、集落から来た村道は当地区を通り、「字 金和田」「字 熊野」を通り、昆陽・伊丹へと続いている。また、南境にも南野村を経て伊丹に向かう村道がある。集落に近く、四角形で低い湿田のため水害湧水が多く、「天神川？」が決壊して洪水になったときは、一番に冠水の被害にあったそうだ。

17. 川ノ上 (カワノウエ)

その名の通り、野間井（現在の富松川）の北（上）に沿って、南野村への村道との間の、東西に細長い地区である。東部の共同墓地前附近は高台農地の上に、水路の最下流であったので水利の便が悪く、そのため、小面積の畠が多く、「茶園」と呼ばれ、「墓の前の田」と呼ばれた。

18. 黒土 (クロツチ)

野間井川の南にあり、西から東に広がるほぼ三角形の地区で、野間井川の氾濫により、そのヘドロが流れ込み、耕土が黒くなったと言われている。田の高低差も少なく平坦で、一筆毎の面積も広く、土質が稻作に適した良質の水田であった。ただ、西部の一部の地区は「懸樋」で「字 東向・川ノ上」から引水をしていた。この地区から南および南東、尼崎市に至る地域（才満・小池・四鞍田・車塚・イノソ・高上）は、昭和 11 年頃、京阪神急行電鉄に買収され（尼崎も含む）、宅地化され、さらに、昭和 48 年 12 月 1 日町名改正され、「車塚 1～3 丁目」となっている。此の地の東北角は、野間・南野と尼崎の 3 地区の境界点である。当地区的形状も内容も大きく変わった。大手企業のグランドであった所は、笛原公園・有料老人ホームを除き住宅地となっている。此の地の東北角は、野間・南野と尼崎の 3 地区の境界点である。現在では、車塚・南野・安堂寺町さらに尼崎市富松町の 4 地区の境界点となっている。

19. 才満 (サイマ) (才万・才間)

南北にやや長く、平坦な地形である。「字 黒土」の南東、「字 小池」の東にあり、野間地区のほぼ東南端にあたり、東に尼崎（東富松村）に隣接している。此の地の意味は不明であるが、興味を惹かれるのは、この隣接している尼崎の地区は「字 才間」である。また後述する「字 四鞍田」「字 車塚」から、「高貴な人」の用具が出土したことに関連があるのだろうか？この地は宅地化の後は、殆どが学校共済組合病院（北半分）であり、大手企業のグランドに 2 つが小さく飛び地としてあり、3 つの地区になった。

20. 小池 (コイケ)

北西の小池橋から尼崎（東富松村）まで、南東に細く長く「弓なり」になった地域で、今は車塚 1～2 丁目の小池住宅から学校共済組合病院までの範囲だが、小さな池があった、では片づけられない。野間井川（富松川）の南にありながら、北西部はやや高台で井川の水を使えず、井川の北の「東向（ヒガシムカイ）」の水を（「字 黒土」の西部と同じ水路の末流を）井川の上に樋（とい）をかけて「懸樋」で引水した。それでも水利

が悪いため、用水用の小さな池を用いたという。文字で記してこそ「小池」だが住民の苦労がいかに大きかったかを知ることができる。造成後は大手企業のグランドの南半分とその西の住宅地になった。

21. 四鞍田（ヨクラダ・ヨクラタ）

昔、高貴な人の行列に用いたと思われる牛または馬の「鞍」が4つ出土したことから、この地名になったと言われている。当地区北部（小池橋南部）は、井川の曲がり角にあたり、常に冠水する低湿地帯で、沼田があり、土質も深かった。この沼田から上記のものが出土された。

22. 車塚（クルマヅカ）

場所は不明ですが、「貴人の使った牛車の出土した塚」また、「丸く車座のように並んだ塚」（昔、野間地区が戦場になった時期があり、ここで戦死した人の塚）があったと伝えられている。野間地区の最南端にあり、南東から南部にかけて尼崎に接している。造成後は大手企業のグランドおよび学校共済組合病院の南の住宅地になった。

23. イノソ（猪野走）

「字 四鞍田」「字 車塚」の西にあり、北西より南東への長方形の地区で南部は高台地になっている。集落から遠く離れた原野であり、「猪野走」と書かれていた時もあるように、猪がよく走っていたといわれている。また、水利の届かない高台地ということもあって、近世でも干害を一番に受けるため、無花果等の果樹が栽培されていた。造成および区画整理され、東部を野間寺本線が走り、住宅地になっており、「猪野走」の面影は全く感じられない。

24. 中小路（ナカショウジ）（中少路）

野間下井（南部農地）の中央にあり、北部の広い逆三角形の形をしている。東にある「字 垣内」地内の「楠の木の森」から、当地区の北に隣接する「字 來徳」との間（境界）を「字 四鞍田」「字 イノソ」方面に通じる少し幅の狭い（4~5 尺）の農道があり、西には、集落から東富松村に向かう村道（行基道・富松道）がある。これらの「道」との関係で、この地名になったのではないか？区画整理されて、この2つの道は無くなっている。

25. 来徳（ライトク）

集落地「字 来福地」の南東の筋向いにあり「子孫繁栄を願って（来福）と対称的な地名が意識的に」つけられた。または、集落地から、毎朝この方向を押し、「徳の来ること」を祈ったところからつけられた。東部は低湿地で、井川が氾濫すると水害を受けた。西部は高台地で水利が悪く、「池があった」ともいわれ、ここもまた、東ノ口水路から「懸樋」で灌漑していた。区画整理に依り、大きな区画の田になった。

26. 高上（タカンジョウ）

市境界に沿って北西から南東に長い形をしており、南部に隣接する東富松村の一部の地域は低湿田であったのに比較して、当地区は高台の良質田であったためこの名になった。区画整理されている。

27. 森本（モリモト）

北に隣接する「字 垣内」地内の2つの廃社跡の森（健速神社分社跡・稻荷神社塚—636番で今でも楠の木の古木が残っているので「楠の森」と呼ばれている。）の南部に隣接しているところから、こう呼ばれた。この地区の南東には「字 高上」が隣接し、同様に、西部は市境界であり、現在は尼崎市の「武庫東中学校」が隣接している。水利は「字 来徳」西側水路を利用して、井川から直接「楠の森」の中少路、高上水路と分水しているので便利であった。区画整理されている。

28. 垣内（カキウチ）

前記のように、この地区には、2つの神社があった。1つは「古宮」といわれ、「若宮」に対称するものである。（今は払い下げられて無くなっている。）「楠の森」は今でも「健速神社」の領域？また、昔には、この神社の領域（境内）を表示する「垣」があったといわれている。この「垣の内」の地域である。北部は狭く南部が広い、細長い台形で、低い湿田であった地区。

29. 来福地（ライフクチ・ライフクジ）

先祖がこの土地を住居として定めるにあたり、「子孫に幸福が来る事」を念願して、つけられたという。北西には神社の森「健速神社」があり、西には「大空寺」、乾（北西）及び翼（南東）には、それぞれ「若宮」「古宮」の分社を置き、水量は豊かで、井戸水も良質の環境の整った宅地である。この集落は、すぐ南で尼崎（時友）に隣接している。

※「野間健速神社御由緒」

慶雲年間（704～708年）、東の森と西の森の両所に、東健速神社・西健速神社と称する二社ありて、東野間村西野間村の氏神とせしも、和同年間（708～715年）東野間村を西野間村に合併し、村名を野間村と改めしかば、神亀元年（724年）9月両社を合併の上、須佐男神社と称し現在の地に遷座す。明治6年8月村社に列し、同27年8月13日に健速神社と改称す。（神社序記載の言い伝えによる古文書より抜粋）

野間自治会長 芝田 直一 氏

野間農会長 稲田 正 氏

野間水利組合長 芝田 進 氏

昆陽井会計 辰巳 順彦 氏（元野間西土地区画整理組合理事長）

元市議会議員 稲田 兵太郎氏 野間地区出身

他 地元古老・有識者 の言

他 文献を参考にまとめたものである。

（文責：足立繁）